



十三夜

秋から冬の十三の掌篇

葉山ユタ



日常に軽い絶望と、それさえも形骸化させる惰性を抱えて生きている。

そんな時たまたま、あまり話した事の無い同僚と、帰り道が一緒になった。

彼女は、「ありがとう」を一日千回言っていると、運が開けるとか言うけれど、ウチら、毎日仕事で死ぬほど言ってるのに、開運した覚えなんかないよね、とか仕事の愚痴を面白おかしく話した。

面白い人だった。

こんなに面白い人なら、前からもっと話せば良かった。

「カルマなんじゃないのぉ？前世で悪い事したせいとか。あと、魂のステージが低いとか若いとか、前にテレビでよくやってたの見たわ」

私が思いつきの戯言を言うと、彼女はやけに澄んだ目をして、ただ口元はにやりと笑って言った。

「カルマなんて無いよー。魂にはステージなんて無いし、年齢も無いよ。魂はね、みんな平等。って言うより、みんな均一なの。対等なのよ」

え？っと思って問いただそうとしたら道が分かれて、彼女は、お疲れ様と手を振って、私と別方向にどっどっどん行ってしまった。

その後、彼女とはシフトが合わず、ゆっくり話す機会が無いままだったが、ある日、他のスタッフから急に

辞めたらしいと噂を聞いた。

連絡先も聞いていなかったのに、結局彼女と私的な話をしたのは、その時が最初で最後になったわけだが、あの時彼女が言った「魂は対等」という言葉と、その夜、空にかかっていた中途半端な半月が忘れられない。

そして、人間関係で挫けそうになった時、その時の彼女の言葉が、小さなつかい棒のように私を支えてくれている。

彼女に「ありがとう」なんて言ったら、きっと渋い顔をして笑うだろうけれど。

第二夜 - 銀杏の葉が色づく頃



私が一番好きな季節は初夏。

緑が色濃く空の青さも鮮やかになる、暑さを秘めた爽やかな空気感が好きなのだけれど、今年の夏に出会った人は、紅葉が鮮やかで空気に寒さが忍びこむ、空の高い秋が一番好きだって言っていた。

それじゃあ秋になったら、どこか紅葉の綺麗な所へ遊びに行こうよと言っていたのだけれど、木の葉が色づく前に、何だか二人は疎遠になってしまった。

何でだろう、何か気に障る事したんだろうか、と色々考えてみたけれど分からない。

理由を聞いたところで意味ないし。

いいや、もう。紅葉狩りなんて行かないわ。

ギンナンでも拾おうか。

第三夜 - 間取り図

学生時代の友達が、自宅を出て一人暮らしをするって言うから、友達二人と手伝いに行った。どうせ俺らのたまり場になるって暗黙の了解があるから、手伝いがてら、泊まりで遊べるように、あれこれレイアウトの注文も付けていたわけ。

そいつは細かい性格で、パソコンソフトで家具だの間取りだのをレイアウトしてあって、体を動かさないとノートパソコンにかじりつき、ここにテレビを置いたらベッドが置けないとかぶつぶつ言いながら、マウスでパーツを動かしては戻し、ずらしてはため息をついている。

動かないそいつに、俺はちょっとイラッとしてきた。

「パソコンはいいから、体動かせよ。荷物は全部入れたけど、全然片付いてないじゃん」

「家具を設置してから、失敗しました変えましょうじゃ、時間と労力の無駄だろ？ちょっと待っててよ。住むのは僕なんだから」

「つーか、何で今、そんな事やってんのよ？引越し前に決めとけや」

「ずっと忙しかったんだから、仕方ないだろ。じゃ、取りあえず、このレイアウトで頼むよ」

そう言いながら、ノートパソコンの画面をこちらに向ける。

もう一人の友達は、ニコニコしながら画面を確認し、よしやろうか、と軍手をはめた。いい奴だ。

三人で小一時間ほど働いて、なんとか引越し荷物は所定の場所に落ち着いた。

友達は、実際の部屋とパソコン上の間取り図を交互に眺めて、感心したように言った。

「すごいねえ、この間取り図、リアル間取りと全く同じだね。良く出来てる」

借主の奴はご満悦だ。

「だろ？全部の家具のサイズ測ったり大変だったんだぞ。しかも立体図も見られるんだから」

マウスで画面の間取りをグルグル動かすと、確かにポリゴンで3次元的に見られる。

無駄な事に時間かけやがって。アホかいな。

しかし、友達はしきりに感心している。

「ぼく、あんまりパソコンで詳しくないんだよね。ちょっといじっていい？」

「いいよ、もう終わったし。休憩しようや。缶コーヒーとお菓子有るから」

俺は缶コーヒーを貰って、設置し終わった中古の二人掛けソファに腰掛けた。

借主の奴もベッドに腰掛け、缶コーヒーを口元まで持っていったが、そのまま彼は固まってしまった。

目が空中を見つめている。

俺もつられてそっちの方を見てみると、さっき設置したばかりの薄型テレビが空中をクルクル回っている。
一瞬、何が起きているのか分からなかった。
その後、心臓が止まりそうになった。

あわあわしながら、パソコンをいじっている友達を見ると、彼は回るテレビをのんびり眺めながらニコニコ笑っていた。

「すごいねえ、これ。こっちを動かすと、現実の物体も動くんだね」

そんなわけねえだろ！！

そうそう、こいつのあだ名は「神様」だったっけ。



鬼灯のランタンに灯りを燈せ。

雪が降る前に。

赤、青、黄、緑の小さな灯りを。

点滅する灯りが枯庭を飾るよ。

夜も更けた頃、老いた精霊が、ランタンを一つ持ち帰る。

雪あかりと月明かりだけでは暗いのだ。青い灯りを一つ貰おう。

世界の片隅と、野ねずみの穴を照らすのだ。

ははは、と精霊が乾いた声で笑う。

鬼灯のランタンがチラチラ輝く。

冬が来る前に。

第五夜 - 坂道

見知らぬ街を、地図一枚頼りに歩いている。

ははぁ、この真っすくな広い坂道を一番上まで登ればいいのだな。

だだっ広く乾燥している坂道は、最初は緩やかな傾斜だったのに、進むにつれ段々勾配がきつくなり、しまいには地面にへばりついて歩かざるを得ないような急傾斜になってきた。

もう、へとへとだ。坂の頂上はまるで見えない。ピーカンに晴れた青空が恨めしい。

上から乗用車が転がり落ちるように坂を下ってくる。おいおい、タイヤが宙に浮いてるよ。

もう立っていられない。両手両足を使って、ロッククライミング状態で坂を登る。

這いつくばってしばらく進んでのち、やっと坂の上に出た。

坂の両脇は切通しで、正面には豪華な洋風ホテルしかなかった。

はて、ホテルに用は無いのだが。

ホテルの正面玄関前には、豪華な地中海風のタイルが敷き詰められていた。

ふと見ると、そのタイルの床の上に銀色のコインが落ちている。拾ってみると、天使が刻まれている。

気に入った。

ホテルの入口に向かって、一つ、また一つとコインが落ちている。

どうやら、天使が道案内をしているらしいぞ。

ようし、ホテルの中を突っ切って、向こう側に行ってみようか。

へえ～、薪ストーブ使ってるんだ。

暖かいけど、しょっちゅう薪をくべなくちゃいけないから、ちょっと面倒だよね、薪。

石炭も使えるの？ああ、いいね、石炭の火は長持ちするもんね。

そうそう、そうだった。灰を捨てるの面倒だわ。毎日やらなきゃいけないし。

でも何か楽しいじゃん。

火の面倒をみるって楽しいよ。火を見るのも楽しくない？

今の生活だと、ロウソクの火以外は、火ってあんまし見ること無いよねえ。

あのね、私、薪や石炭の燃える匂いって、すごく好きなんだ。

冬の匂いなんだけどさ、すごくあったかい匂いだよね。

今度、焼き芋焼こうよ！ね。ホタテでもいいよ（笑）





古本屋で、絶版になっている文庫本を買った。

出版社も、とうの昔に潰れている四十年くらい前の本で、ある古典の解説本のようなものだ。

日に焼け、表紙もボロボロだったが、その装丁のシンプルな木版画が気に入って買った。まあジャケット買ってところだな。

帰りの地下鉄の中で、パラパラとめくっていたら、一枚の写真が挟まっていた。買った時は気付かなかったが、セピア色に変色した古い写真だった。

本も古ければ写真も古い。

家に帰って、簡単な晩ご飯を済ませ、缶ビール片手に、再びその写真を取り出して眺めた。

写っているのは洋館のようなのだが、日本の建物だろうか？撮った人間は、この建物の向かいの、少し高い位置から、この建物を眺めていたのだろうか。その人が、この本の持ち主だったのかな。

そして菜のように、この本に写真を挟み、毎日眺めていたのだろうか？

どうして？

写真を挟んだまま、文庫本をベッド脇のテーブルに置き、ホロ酔いでベッドにもぐり込んですぐに眠ったのだが、朝方奇妙な夢を見た。

あの写真の建物の二階、左から二番目の窓に女の人の姿が見える。一生懸命背伸びして、こっちに向かって手を振っている。

そうして、向かいの建物の二階から、やはり窓から身を乗り出して手を振っている男がいる。一生懸命、彼女に、声にならない思いを伝えようとしている。

「ぼくだよ！来たよ！」と。

まあ、その一生懸命手を振っている男が僕自身の姿だったのだけれど、何の不自然さも感じなかった。だって、僕も彼女も一生懸命だったからね。

第八夜 - クリスマスの思い出

クリスマス・ソングは誰の歌が好きって、あの人に聞いたら、ナット・キング・コールだと答えた。私は山下達郎だと言った。

クリスマス・ツリーは、電飾で色とりどりに飾られた、真っ白いプラスチック製のが欲しいと言ったら、あの方は、本物の樅の木に木製のオーナメントを飾って、電飾はシンプルなのがいいと言った。

穏やかで優しい人だったけれど、何だか合わないと思い、その年のクリスマスの後に別れた。

あれから十数年経ち、クリスマスが近づくと、彼の事ばかり思い出される。

結局私は子供だったのだろう。今なら彼のような方がいいと思える。
今更、彼の消息を捜そうとは思わないのだけれど。



第九夜 - 裏メニュー

忘年会の幹事を頼まれ、いい店をネットや雑誌で探していたのだが、やたら食にうるさいメンバーが、あれやこれやとケチを付ける。

じゃあ、どんな店がいいんだと聞くと、通好みの裏メニューなんかがある店がいいなあなどと、ふざけた答えが返ってくるじゃないか。

全く何を訳の分からない事を言うんだか、と思いながらネットで検索していると、職場の近くに雰囲気の良い小料理屋を見つけた。

値段も手頃だし、ちょっと下見してみようと、仕事が終わってから、その店に一人で行ってみた。

カウンターで一人飲みながら、適当に料理を頼んでみたところ、どれも出汁の効いた絶品の和食だ。酒の種類も豊富だし、これならみんな文句無いだろうと気を良くしていると、皆の言っていた裏メニュー云々の事を思い出し、失礼かなと思いながら板前さんに尋ねてみる事にした。

「あの一、失礼ですが、このメニュー以外に、裏メニューなんて有りますかね？」

三十代半ばくらいの色の白い、いかにも板前という短髪の男性が、ぎょっとしたように私を見つめた。

「お客様、どなたかから、そのような事をお聞きになったんで？」

「いや、特に...いや、聞いたような聞いてないような...はは、どうだったかな。いや、無ければ別にいいんだ」

ちょっと反応が妙だったので、私は言葉尻を濁してしまった。すると、板前さんは私の方にそっとにじり寄り、小声で尋ねた。

「あの、それは鶴のスープでしょうか？それとも　　の　　...」

「つ、鶴？い、いや、いいんだ。聞いてみただけだから、今日はこれで結構」

板前さんは、さようでございますか、と神妙な顔で答え、また何事もなかったように仕事に戻った。

結局、忘年会は一般的な大衆居酒屋を予約し、グルメどもには散々な言われようだったけれど、普通が一番だと私は思う。グルメなんて、突き詰めれば外道じゃないのか。

が何かって？それはとっても口に出せないよ。

第十夜 - 有るか無いか

例えば、箱を貰ったとする。

封印され、邪悪な物が入っているから、絶対開けてはいけないと伝説を語られたら、その中に何も入っていないと疑っても開けられない。

例えば、壁の中に美少女が塗り込められていて、千年経っても年を取らず美しいままなのだ、と言われたら、壁の中には何も無いと思っても、永遠の美少女を思い浮かべてしまう。

それを信じれば、それは有り、信じなければそれは無いのだ。



第十一夜 - むばたまの

忘年会がお開きになり、二次会を遠慮してみんなと別れた。

気を使って飲むのは好きじゃない。

僕は一人で飲み屋街を抜け、地下鉄の駅に向かったのだが、前に一度、先輩に連れて行ってもらったバーに行ってみようという気になった。

年配の落ち着いたマスターと、女性のバーテンダーの二人しかいない小さなバーだが、一杯をじっくり飲むいい店だ。

雑居ビルの二階、木製のドアを開けると、チリンとベルが鳴った。

空いている。良かった。カウンターの端に女性客が一人、ボックス席に中年のカップルがいるだけだ。

マスターは記憶力が良く、一度しか来ていない自分の事を覚えていて、夏に一度お二人でいらっしやいましたねえとこやかに笑い、おしぼりをくれた。

女性バーテンダーは、無愛想ではないが物静かで、そこそこ綺麗だ。

ギムレットを頼んでちびちび飲んでいると、カウンターの端の女性が気になってきた。

三十前後だろうか、真っ黒で艶のある長い髪が背中に垂れている。

タイトな黒いワンピースに、やはり黒のロングブーツで黒づくめ。スラリとしたしなやかな肢体で色っぽい。

片手に握った水割りのグラスの中をじっと見つめて、微動だにしない。

何となく顔を見ていたら、視線に気づいたのか、ふと顔を上げてこっちを見た。

はっきりした顔立ちで、猫のような大きな目をした色白の女性だった。美人だが、一筋縄では行かない感じだ。

慌てて、今度は僕が自分のグラスの中を覗き込む。

ボックスにいたカップルが席を立って、会計を済ませて出ていった。夫婦のようだった。

マスターが、ちょっと、とバーテンダーに声を掛けて奥に引っ込んだ。バーテンダーは、はいと答えて、ボックスを片付けに行く。

カウンターには僕と、美人だけだ。こういう時には声を掛けるべきだろうか。

でも、待ち合わせかもしれないし。ナンパで成功した事は、残念ながら一度もないし…。

どうしようかと、またチラリと彼女の方を横目で見ると、彼女の背中に垂れた黒髪が揺らいだ気がした。

何か変な気がして、その背中の髪をじっと見ていると、髪はうねうねと捻れて動き出し、中で何かが光った。

それは猫のような大きな丸い目が二つ。照明を反射し、キラリと光った。

僕はギムレットの残りを一気に飲み干すと、カウンターに戻ったバーテンダーに会計を頼み、店を出て地下鉄駅まで急いだ。

しばらくギムレットは飲む気がしない。

第十二夜 - 列車内にて

出張帰りの特急列車はガラガラだった。平日の夜ならこんなものだろうか。指定席なんか取らなくても良かったな。

しかし、列車の中で周りに人が居ないってのは気楽なものだ。携帯で話そうが足を投げ出そうが、誰にも文句を言われぬ。

飛行機みたいに、すこし暗くてブックライトがあれば最高なんだがなぁと思いながら、そうだ、いつもは出来ないけれど思いっきり椅子を倒してみようと、肘置きについている背もたれ用のボタンを押して、背中で思いっきり椅子の背を押した。

グンと背もたれが倒れた。おお、これはいいや、と気を良くして悠然と足を組むと、突然後ろからガツンと椅子の背を蹴られた。

わわ、後ろに人がいたのか？！

慌てて背もたれを戻して、後ろの人にすみませんと声を掛けたがシーンとしている。背伸びして後ろを振り返ったら、そこには誰もいなかった。

僕は一瞬呆然とした後、三十秒で荷物をまとめて、同胞の群れ集う自由席に移動した。静けさを破って、どなたかの逆鱗に触れたらしい。くわばらくわばら。



第十三夜 - メリー・クリスマス

マンションの居間に、高さ2メートルほどのクリスマス・ツリーを飾っている。

ブルー、レッド、ホワイトの電飾がゆっくりと点滅してキレイ。星や天使や、ガラスのオーナメントが灯りを反射し、キラキラと輝いている。

子供が出来ても、歳を取っても、ずっと飾れるようにと、ちょっと奮発して買ったお気に入りのツリーとオーナメントだ。年に一週間くらいしか飾らないけれど、眺めているだけでしっとりと幸せな気持ちになる。

悩みも不安もどこかに置いておいて、ただじっと美しいツリーを眺める時間が好きだ。

玄関のドアがガチャリと音を立てて開き、夫がケーキの箱を持って帰ってきた。居間のテーブルにケーキの箱を置いて、コートを脱ぐ。

「25日の夜になると、ケーキ安売りするだろ？ちっちゃいのを一個買ってきたよ。お前の好きな、フルーツたっぷり生クリームたっぷりのケーキだぞ」

「もう、いつも25日の夜にケーキよねえ」

夫はケーキの箱を開いて自慢気だけど、やっぱり予約の必要な有名店のケーキの方が美味しそうだわ。彼はちょっとメタボ気味になってきて、ケーキなんか本当は食べたくないのよね。

「ロウソク、今日はちょっとファンキーにしようか」

夫はケーキに付いてた、赤や黄色のストライプが螺旋状になっているロウソクを持って、いそいそとライターを探す。彼も私もタバコを吸わないので、ライターやマッチは普段使わない。

「台所の引き出しよ。右手の小さい方に入ってるわ」

やっとライターが見つかったらしく、二本のロウソクをロウソク立てにセットして火を付けた。

「お前、クリスマス好きだったもんなあ。ツリー、頑張って一人で飾ったぞ、キレイだろ？ケーキ、後で切ってあげるな。赤ワインもお供えするから…。あ、花。花を買うの忘れた。ああ、気が利かないってお前にいつも怒られてたなあ、俺。正月には買うから勘弁してくれ」

夫がロウソクの前で手を合わせて、しみりと言った。

あたし、本気で怒ってたわけじゃないよ。花は、なくてもいいよ。

「お前はいいよな、ずっと若いまんまで。俺はどんどん歳食うわ」

そんな事ないよ。歳より若いよ。いつまでも元気でいてね。

「正月には、おふくろさんにもご挨拶に行くから」

うん、母さんの事、よろしくね。

夫が仏壇の前からツリーを眺めて、ポツリと言った。

「歳を取っても子供が出来てもずっと飾れるように...か。俺一人じゃ、かえって寂しいよ」

ゴメンね、一人にしちゃって。

メリー・クリスマス。どうか幸せでいてね。

この作品は、2010年11月から12月にかけて、ブログ「[白嘘物語](#)」に連載していた
掌篇から13篇を抜粋し、加筆、修正したものです。

お読み頂き、誠にありがとうございました。

尚、ブログは2011年12月に別のアドレスに移行しています。
新しいブログは「[白嘘物語-つくもうそ物語](#)」です。



「十三夜」



2010年12月26日



著者 葉山ユタ



Copyright Y u t a H a y a m a All Rights Reserved